母親と子どもをつなぐ支援

加　藤　寿　子

1．問題と目的

子どもを育てる環境には、親のニーズに即したさまざまな子育て支援事業や保育サービスが用意されている。これは、子どもを取り巻く環境が変化し続け、子どもを育てる家庭そのものの環境が変化しているからである。また子どもを持つ親に対しては、養育力の低下が懸念され、子育て不安や育児ノイローゼ・児童虐待などの問題は複雑化しているため、支援の形や質にも様々な対応が必要とされている。しかし、その一方で支援をする側からは、本当に子どもや親の利点となっているのかといった疑問も聞かれることがある。「支援といっても、誰のための支援なのか」「子どもの最善の利益となっているのか」「子どもは誰が育てるべきなのか」という保育者の声からは、支援をしながらも不安な様子が伺える。この情報化社会の中で、子育てに関する情報は氾濫し、本当に必要とするものは何なのか判断がつかず混乱しているのが現状である。

落合（1994）は、「今、子育てがうまくいっていないように見えるのは、子どもの成長にかかわるネットワークが変動しつつあり、その再編成がスムーズに運んでいないから」1）としている。確かに子どもを取り巻く環境が変化しただけではなく、親にとっても就労形態や生活形態そのものが変化し、物の価値観は変化し続けている。そのため今までと同じネットワークは構築されにくいと考えられ、この状態のままでは子育てはできないところまで来ている。つまり、子どもを持つ親にとって、様々な支援があっても、情報が氾濫し自分で判断がつかないためにさらに不安傾向となるのは、必要な支援が必要な親に届いていないことにあると考えられる。そして、その不安をもつ母親の中には、ごく些細で身近な問題によって不安傾向を強めている母親は少なくない。そのため様々な支援の中でも、「母親と子どもをつなぐ」あるいは「母親と母親」「母親と地域」をつなぐ支援であることが、ネットワークを再編成することの第一歩であると考えた。

そこで、本学でこの6年間にわたり行われてきた「子育て広場」は、子どもとのかかわりを具体的に教える場ではなく、子どもと少し離れたところから子どもを見つめ、親同士が思いを話し合うことで、子どもや子育て・自分自身について考える場となっている。つまり「母親と子ども」「母親と母親」「母親と地域」をつなぐための支援ができないかを模索してきたのである。本研究では、本学の「子育て広場」において、参加する母親の思いに注目し、母親の現状を知るとともに、「母親と子ども」「母親と母親」「母親と地域」がつながる瞬間を捉え、母親にとって必要な支援とは何かについて明らかにすることを目的としている。これは、「子育て広場」で行われる母親同士の話し合い終了後に実施した感想をもとに考察する。さまざまな子育て家庭のニーズにあわせた支援事業など対策は採られてきているが、本学で行われてきた「子育て広場」の活動をもとに、支援活動の果たす役割を検討する。

(1) 今、子どもを育てること

子育てに関する支援や保育サービスが様々ある中で、一方では支援によって、親と子どもがさらに離され親と子の関係はさらに複雑化することが懸念されている。また保育現場では、「親がただ楽をしているのではないか」「支援は親をだめにする」といった声が聞かれることも、支援を進める上で多くの問題があるといえる2)。 これは、支援の形態や目的、また利用している家庭の抱えている問題も様々であるため、外部から理解されにくいことも考えられる。ここで、改めて原点に立ち戻り「子どもは誰が育てるのか」と問うたとき、おのずと親や家庭が子どもを育てることに責任を持つことはいうまでもない。その上で、子どもを育てる側に、育てることへの問題や不安を持っている親や家庭があるならば、子どもを育てることの支援の形を丁寧に読み解くべきであると考える。

鯨岡（2002）の関係発達には、人は誰も突然育つことはなく「育てる―育てられる」という関係のなかから育てられ、これは〈育てる者〉である養育者自身も、1世代前の両親によって育てられた〈育てられる者〉であったという考え方である。こうした関係は、世代から世代へと引き継がれていく過程において、反復もしくはリサイクルされ、同時進行しながら変容していることから、「関係のなかでの発達」と「関係としての発達」を含めて「関係発達」と捉えた。関係発達の特徴の一つとして、「育てられる者」から「育てる者」へ移行しながらも、それぞれの世代が同時進行しながら、関係発達が複線的に進行していくことがあげられている。育てることを通して、自分がかつて「育てられる者」であったことや育ててくれた人の思いにも気付くことができる。世代から世代へとリサイクルされていくと考えられている3)。

この関係発達から子どもを育てることは、「育てる―育てられる」という関係を持つことであり、これを支援に重ねてみると、親のためだけの支援ではなく、子どものためだけであってもならないと考えられる。これは、母親と子どもの関係に注目せずに一括して預かる支援を進めてしまう前に、「育てる―育てられる」という関係を持つことの意味や「母親と子ども」をつなぐ実感を持つことの重要性に気付かせることも、現在の母親にとって必要な支援ではないかということである。様々な子育てに関する問題がある中で、複雑な支援が進み、子育てができる状態の母親までもが、母親から子どもを離してしまっている現状ならば、「母親と子ども」をつなぐ仕掛けを作ることにより、母親が母親として育つことのできる支援になるのではないだろうか。

(2)「子育て広場」の概要

本学において、地域の子育て支援活動として「子育て広場」が開始されたのは、平成18年5月からであり6年が経過した。活動の目的としては、地域の子育て家庭の支援をするためであることと、保育者養成機関として質の高い保育者育成のためである。

現在、地域の子育て家庭を対象とした支援活動を、月に2回開催している。1回は、「子育て広場」の名称で、参加親子を固定し、一年間同じメンバー（定員20組）でかかわりを持ちながら参加する形態となっている。開始当初は、自由に参加できる募集であったが、毎月募集するため、連続して参加できないことや、参加者である子どもと母親が環境に慣れないこと、またスタッフである学生にとっても子どもや母親について把握できないなどの問題点が多くあげられていた。そのため、継続して参加することで、子どもも母親も安定した環境

となり、また学生にとっても継続して成長を捉えることができるために、参加者を固定する形とした。もう一回は、「とことこ広場」の名称で場所の提供を主とした支援を行っており、遊び場を開放し自由な参加ができるようになっている。気軽に参加できることや時間を気にせずに出入りができることも、初めての母親にとっては参加しやすい条件のようである。

「子育て広場」の活動内容は、子どもは自由に学生（専攻科保育専攻）と遊び、母親は同じフロアで他の母親と話しあう場を持つ。子どもは、母親と遊び場を行ったり来たり自由にでき、安心感を持って遊ぶことができる。活動時間は、10時40分から12時00分であるが、遊び場は朝から開放しているので、早くから来場する親子も多い。また活動終了後も、会場に残り遊ぶ親子も多く、ここで知り合った母親たちが、さらに関係をつなげる場にもなっている。

「子育て広場」の特色でもある母親同士の話し合いには、スタッフである学生が加わり、テーマを提示しながら母親同士の話し合いをサポートしていく。テーマは、学生が毎月検討したものを提案しており、このテーマが「きっかけ」となって母親の思いが現れるため、母親にとって身近に考えられるものを準備している。母親たちの話し合いは、その日のテーマによっても、メンバーによっても内容の展開は異なるが、自由な雰囲気の中で話しやすい場となることを留意し、誰もが話せるよう学生がサポートをする。ここで話し合う母親たちは、子育てをしている点は共通であるが、年齢も経験も異なる母親たちであり、それぞれの母親の背景を知らずに話していくため、多少の緊張感と、ある程度は話しても構わないといった安心感が混在しているようである。そのため、回を重ねるごとに母親たちの中に、子どもを通して何でも語ってよい場となり、一体感を持ち始めていく過程が見られる。話し合い終了後には、感想を記入し、話し合いを振り返る母親の姿や、わが子の変化に気付く母親もいて、どれも率直な母親の声である。この声を丁寧に読み解くことで、母親の思いに近づき、何を考え子どもに向かっているのか、その一部を知ることができると考えている。加えて、支援の主たる目的である「母親と子ども」「母親と母親」「母親と地域」をつなぐ支援となっているのかを検討したい。

2．研究方法

(1) 対象

本研究の対象となる「子育て広場」参加者（母親）は、平成18年46名・平成19年度57名・平成20年度49名・平成21年度20名・平成22年度20名・平成23年度20名、計213名である。調査期間は平成18年５月～平成24年２月である。

「子育て広場」の形態は、開始年度から３年間とその後３年間では、参加募集方法に関して異なるため、母親の人数に違いがある。（平成18年・19年・20年は自由参加の募集であるため参加人数が多く、平成21年・22年・23年はメンバーを固定し継続した参加にしたため20名ずつとなっている。）

(2) 方法

「子育て広場」では、一つのテーマに沿って１時間ほど話し合いを進めるが、終了後の感想には様々な視点から母親たちの思いが語られる。これらの感想は、「書く」行為によって個々に話し合いの内容を振り返り、母親自身が感じたこと気付いたことを短い言葉に凝縮し

ている。そして、短時間でありながら、母親一人ひとりが率直に語り、思いを形にまとめる作業となっている。自分の子どもと他者とを重ね合わせるもの、自分自身を問い直すもの、家族を思い返すもの、自分の生い立ちをたどるものと様々である。ここでは、専門家が相談に答えることはなく、重い悩みや不安を打ち明けることもないが、話し合うことで自身から感じることや気づくことができている。

そこで、この6年間に参加した母親の感想を分類し検討することで、母親の思いを読み解く。分類の視点は、母親の感想から6つの方向に分類した。①情報収集としての場　②子どもを見る場　③自己を見つめる場　④他者を知る場　⑤気分を転換できる場　⑥学生に対する意見の6つである。感想には、日常の生活で身近に子どもと関わっていながら初めて気づくことや、母親同士の話し合いによって感じたことなど様々であるが、雑然と集まった母親の言葉の中から、母親の現状とその思いを考察する。またそれによって、「母親と子ども」「母親と母親」「母親と地域」がつながる過程やつながるための要素について検討したい。感想を記入する時間は、母親によってもその日の活動の内容によっても様々であるが、子どもが近くにいることから、2～3分程度である。

(3) 結果

①情報収集としての場

- お二人育てているお母様もたくさんいて、二人目ができたらこんな悩みも出てくるのだなと先に勉強できた感じで、ためになりました。 **18年11月**
- 保育園と幼稚園との違いで、幼稚園を希望する方が多いことを知り、保育園の選択肢しかない自分には、新鮮であると同時に考えさせられました。幼稚園保育園ともに、教育方法の違いや特徴ある園の様子など、いろいろ知りたくなりました。 **20年5月**
- とても気になる物価の値上げ。皆さん工夫されているんだ、家計簿をつけているんだととてもためになったし、良い刺激を受けました。脱、ズボラ奥さん。 **20年7月**
- 今日は、先輩ママの話が聞けてよかったです。悩んでいたことが大したことないんだってことがわかったり、みんな歯を食いしばっていることがわかったりと、いろいろと話が聞けて、本当に良かったです。また頑張ろうと思えました。 **20年9月**
- 「図書館探検」面白かったです。帰ったら、年少の上の子に、今日はちゃんと本を読んであげようかな。前回読んでいただいた「まるまるまるのほん」図書館で予約して借りました。上の子はすごく喜んで、いつも見ています。お友達のバースディプレゼントにもする予定です。いい本に出会えて、良かったです。 **22年8月**
- 歯磨きのやり方や、お菓子のあげ方など、他の家庭の進め方を聞けて、とても参考になりました。 **23年5月**
- 今日は現実的な話で、いろいろ聞くことができてよかったです。子どもの習い事、どんな子になってほしいのか、今何を大事に子どもと接してあげれたらいいのか、普段思っていても、なかなかじっくり話すことはできないので、お母さん方の考えをたくさん聞くことができ参考になりました。 **23年6月**

考察――子育て中の母親にとって不安の強さには個人差があり多様であるが、子育て広場に

参加する母親の多くは強い不安ではなく、子育てに対する些細な不安が多く、それら不安に対する情報が得られるだけで、安心感を持っている過程がこの感想から伺える。情報の内容には、子育てに関する身近な情報から家計のやりくりまで様々である。しかし、ここで留意したいことは、参加する母親に強い不安は少ないとしても、問題を抱えていないとは言い切れない。筆者の研究からは、情報化社会に生きる母親にとって自力で情報をとることは容易であっても、情報が氾濫し判断できずにさらに混乱してしまうケースが見られることに問題点があると考えている４)。つまり、母親の中には、身近で小さな不安を積み重ねてしまうことで、更に不安を複雑化してしまう恐れがある。

このことから、母親同士の話し合いで浮上する情報について正否を問う前に、子育てには様々な考え方があることを知り、他者はどのように対応したのかを聴くことで、身近な情報を得られることが必要とわかる。そして、不安を持つ母親一人で情報に混乱するのではなく、ここで改めて考え、自分一人ではないという安心感と共に、次の不安や問題に対して自身で判断できる自信へつながるのではないかと考えられる。まさにさまざまな交流の場が必要とされている現在、この広場が、その働きを備えているともいえる。母親同士のちょっとした話し合いから浮上する情報が、「母親と母親」をつなぐ一つのきっかけとなっている。

②子どもを見る場

- 初めて自分から遊びに行きたいという思いを息子が見せてくれたので、それはそれで進歩が見られて、嬉しかったです。先生や学生さんがいつもの息子の様子をわかってくださるのか、声をかけてくださり、その温かさも嬉しく思いました。回を重ねるたびに、ちょっとずつ慣れていく息子を見て、また「来てみよう」と思う母でした。 **19年８月**
- 上の子は、とても楽しみに張り切ってきたけれど、（下の子は）泣くことがたくさんで、ちょっと気付かされました。トラブルに対して泣いて走っていく“自己主張”から、言葉で相手に伝えるようになるのに、行ったり来たりしながら成長中ですけど、下の子の泣きも含めて、「泣く」が夏の母ちゃんの自由研究のテーマにします。うふふ。 **19年８月**
- 毎回息子の様子が気がかりですが・・・「あー今日は遊べた」「今日はダメか・・」と一喜一憂です。今回は“遊びたい！”という気持ちを前面に出してくれたので、ちょっぴり嬉しかったです。そして、いつもは黙って言葉も発しないのに、今日は言葉も出ていたので、だいぶリラックスするようになったのではないかと思います。ここで、息子の成長を感じるのが、密かな楽しみになっています。 **19年10月**
- 普段子どもとは離れて過ごすことがないので、今日は貴重な経験ができました。子どもが人見知りすることを知れてよかったです。 **20年５月**
- 毎回来る度に、子どもの成長がわかります。学生さんへの対応、おもちゃへの反応など、子どもの成長は一直線ではなく、張り切って遊んだり、じっと見つめて私のもとを離れなかったり、成長が面白いです。 **20年10月**
- ３ヶ月ぶりの参加でしたが、たくさんのおもちゃで、今わが子が何に興味があって、どうやって遊ぶのかがわかり参考になりました。今は赤ちゃんにとても興味があるみたいです。 **20年11月**
- ２人の子連れでの始めての参加でした。生後１ヶ月の息子をずっと見ていただき、ありがとうございます。とても楽でした。久しぶりに上の子をずっと見てあげることができました。２歳になった

上の子がいろいろできるようになり、ますます手が抜けなくなりましたが、他のママも同じようなことを思っていることがわかり、なんだか安心しました。 **21年5月**

- 夏の思い出や成長したことを描いてみて・・。毎日慌しく過ぎていく中で、描いたり言葉にすることで、「あ～子どもたちこんなこと成長したな～」とか、「こんなことあったんだよなあ」って、改めて気づかされる部分がありました。育児日記とか付けてないので、時々付けてみて成長を感じてみるのもいいかなと思いました。 **22年10月**
- 10ヶ月の息子は、まだ絵本を差し出しても口に入れたりして、じっくり読んではあげられないけれど、動物や乗り物の絵や写真を見せたら、手でつかもうとしていて、そうやって少しずつ絵本に慣れていくんだなと思いました。 **23年9月**

考察――母親たちは、毎日子どもと関わっていながらも日常の生活に追われ、改めて子どもの成長を丁寧に見たり考えたりする場は持ちにくい。これらの感想からは、短い時間であっても少し子どもから離れることで、遊ぶ子どもの姿を目で追い、客観的に子どもの変化や成長を見つめる場となっていることがわかる。見る機会を持つことは、子どもの変化や成長に気付くだけではなく、普段では気付かない一面を発見するなど、母親の率直な喜びとなっている。これは、母親が子どもと離れていることだけではなく、母親が安心して見ることのできる環境であることと、母親自身がリラックスした心の状態であることが不可欠であろう。これらによって、子どもを見る視点が明らかに変化し、見えなかったものが見えてくると考えられる。つまり、「子どもを見る」行為によって「子どもを知る」ことにつながっていることがわかる。

また、母親として子どもと関わる行為と子どもを見る行為は全く質の異なるものであるが、「子どもを見る」ことによって「子どもを知る」ことにつながっていることから、子ども理解が深まり、子どもとの関わり方が変化していく第一歩となっている。つまり子どもを見つめることが、「母親と子ども」をつなぐ場となっていると考えられる。

③自己を見つめる場

- 今回はロールプレイなどもやって、子どもの気持ちも少し理解できるような気がしました。親の都合で子どもを動かしている自分に気付かされました。もう少し子どもの立場になって考えてあげることも大切なんだと思いました。 **18年9月**
- 自分が疲れているとき余裕がないときは、子どもに対してきつくなったり、いつも怒らないことなのに怒ってしまったり、同じ対応ができない。仕方ないと思う反面、これじゃダメだと毎日繰り返し。時間にルーズになってしまったりとずるずるしてしまい、本当は丁寧にしつけたいこともなあなあになってしまう。上の子に手をかけすぎて、下の子を見てあげられないのがかわいそう。 **18年11月**
- 今日は“自分や子どもと一緒にこれからやってみたいこと”という題で、他の人はやりたいことがあるみたいで、私自身も子どもの手が離れたら、やりたいことを見つけようと思いました。やっぱり自分が輝かないと・・・と思いました。 **19年11月**
- パパとしての男性のお話が聞けたのが、新鮮でした。主人も協力的ですが、本当にパパが上手にかかわっているのって、いいなと思いました。また上手に夫婦の時間を作っている話も、参考になり

ました。イライラせず、ちょっと自分の考え方を変えて接してみると、楽になる部分もあるな〜と勉強になりました。 **20年 9 月**

- （誰も褒めてくれない。自分を褒める。）あまり考えたことがなかったです。今日初めて考えてみて、また皆さんの思いや意見を聞いて、「あ〜私の今の生活、やっていることは頑張っていることなんだ」と気付いた！！一日一つ、自分を褒めてみようかなあと思いました。 **20年10月**
- 普段自分のことを見つめたり、家族が自分のことをどう思っているか、考えたことなどなかったので、とてもいい機会でした。私って頑張っているよなあと褒めてあげたくなったり、ここ直したほうがいいかなと反省したり、これからの自分のあり方を考えたり、もっと自分に磨きをかけようと思ったり、いろいろ考えさせられました。これから更に、充実した毎日を過ごせそうです。 **20年11月**
- いろんなお母さんたちのお話を聞くと、いろいろな考え方や方法があるんだなと改めて自分の育児を振り返れます。子どもも大勢いる中での行動がいつもと違って、新たな一面が見られたこと、嬉しく思います。 **21年 5 月**
- 子どもと家だけでの生活になると「書く」ことがないので、いざ書こうと思うと、字であったり内容であったりが、なかなか浮かんでこない自分にびっくりでした。たまには書いて頭を働かせることも必要だなと感じました。 **21年 7 月**
- みんなの希望や願いが聞けて、楽しかった。「自分の願い」子ども抜きで。というのが、昔は普通に考えていたはずなのに、今はなかなか思いつかなかったり、すごく些細な願いだったり・・。それだけ子ども中心の生活をしているんだなあと思いました（笑） **22年 7 月**
- 子どもの将来、自分の将来を少し考えさせられました。子どもと過ごしていると、考えることがいつも後回しになってしまうので、自分にしっかり考えがなかったなとか、もうちょっと見つめ直してみようと思う、良い機会になりました。 **23年 6 月**

考察――これらの感想から多くの母親は、子どもや家族を優先的に考えることが習慣となっており、自身のことを考えたり自身の将来について考える時間は、少なかったことが分かる。これは、生活の忙しさに原因があるだけではなく、改まって考える機会がなかったことも理解できる。また、自身について気づく部分では、子どもに対する母親としての自身だけではなく、自身からみた内面にある自身について、思いを確認したり変化に気づいたりする行為がないことが分かる。以前は好きだったことも子育てによって諦めた経験や子どもや家族を第一に考える習慣のために、自分のこととなると決断できなくなっているなど、母親の置かれている現状はとても特殊な場となっている。これは、ただ単にできなくなったことを知るためではなく、「字を書くことがない」という感想を持った母親のように、一つの行為や話し合いの中から、現状に気付き、自己を見つめるきっかけになることで、その後の考え方や子育てに対する見方を少しでも転換させることへつながるのではないかと考える。そして、「自己を見つめる場」を持つことが、母親としての自己と、一人の人としての自己を見つめることになり、丁寧に捉えるべき作業であることを母親自身が自覚し、その必要性に気づく場であると考えられる。

④他者を知る場

- 子育ての悩みは子どもが何歳になってもその時々によりいろいろな悩みがあって、自分よりも小さなお子さんを持っているお母さんの悩みを聞くと、自分もその時は乗り越えてきたのだと、再度また自分の子育てについて考えてたり振り返ることができ、いろいろな年の子を持ついろいろなお母さんが集まる場って必要だなと感じました。そして小さなお子さんを持つお母さんが、少し子どもから解放される時間ってそれも必要だと感じました。 **18年6月**
- 子育ての悩みって、私一人ではない。皆もそれぞれ考えて頑張っているのだなと、改めて思いました。家に帰ってもイライラしている時に、皆も頑張っているから気を長くしてやるぞーと思います。 **18年7月**
- 最近子育てをしていて、つらいと思うことが減ってきたなと思っていたところに、また別の悩み事が出てきたりして、育児の大変さというのは対象がどんどん変化していくためにいつまでもいつまでも果てしないような気がしていて、ちょっとめいっていました。でも「この時代はいつまでも続かない」と言われて、とても嬉しくなりました。何度も何度もそう言って励まして欲しいです。 **18年8月**
- 皆様のお話を伺うと、私もそうだなーとか、同じだなーと共感できることも多く、同じようなことを思うことがわかり、安心しました。ちょっと先を生きているお母様のお話は、今の状況は長くは続くものではないのだなーと実感でき、こんな時期も今だけ、貴重な時間なんだなーと改めて思え、これから主人とどんな時間が過ごせるのかなーと楽しみも膨らみました。 **18年8月**
- 子育ての悩みはそれぞれの家庭でさまざまに違うのだな〜と感じました。男の子と女の子の違いもあるし、その子の性格もあるし、みんなそれぞれの考えもあって、どの家庭もみんな親子ともども頑張っているんだな〜と思いました。いろいろな話を参考にしながら、我が家では我が家流の子育てで楽しい日々を過ごしていけたら良いなと思いました。 **18年11月**
- 他のお母さんたちの悩みを聞いて話をしていると、「あーそういえばあったな〜。」とか「そんな考え方もあるんだ」とか、普段はあまり立ち止まって考えてないことを、自分なりに受け止めて考えることができました。 **19年6月**
- 将来の話まで、自分の経験や子どもに願うこと、お母さん同士で本音トークで来たかなと思いました。それぞれ子どもに対する思いは、細かいところから大きな部分と差はなく、親も一人だけじゃないと感じられました。気持ちもすっきりしたなあと思った時間でした。 **23年6月**

考察——母親同士が話し合うことは改めて他者の気持ちを知る場となっている。地域のコミュニティーが編成されていた時代には、道端で立ち話をする母親たちの気軽な井戸端会議は、ごく当たり前な風景であった。しかし、地域のコミュニティーが減少した現在、他者の話を聞く機会は日常のことではなくなってきている。ここでは、他者の話から、母親が子育てを振り返り、現在の自身と重ね合わせるなど、視点を変えて考えるように変化している。そして、様々な子どもがいる中で、母親たちも様々な立場や考え方があることを知り、様々なケースがあることに気づいている。

また他者の話から、「自分だけじゃない」「みんなも同じだった」といった声が多く、孤立して子育てをしている思いから、一人ではないという安心感を持つ母親が多いこともわかる。すでに子育てを体験してきた母親は、これから体験する母親に対して自分の体験を語り、こ

れから体験する母親は不安であっても自分の思いを語ることで心を安定させている。すなわち、誰かに自分の思いを語り聞いてもらう行為や、他者からの意見を聞く行為は、それぞれの母親に安定感をもたらし、それによって自分で答えを導き出す作用となっている。

⑤気分を転換できる場

- 今日初めての「子育て広場」に参加させて頂いて、児童館などへ行くのとはまた違い、先輩お母さんなどのお話も聞くことができて、嬉しかったです。自分の気持ちをこんな風に皆様の前で言うこともないので、なんだかそれだけでも気分が少しすっきりしたように思えます。 **18年 6 月**
- いつも先生がいろんな話を引き出してくださって、自分が話せてすっきりもするし、ほかの方のお話も聞けてとっても楽しいです。帰るとき晴れ晴れした気持ちになれます。子育ては大変だよね〜と言ってもらえると（よくやってるねとか）すごく楽になって、また向かい合おうと思えるし、子育てできる自分が幸せだなと思えます。 **18年10月**
- 音楽科の演奏とっても素敵でした。前に出て踊っているわが子の表情が、とっても嬉しそうでした。サンタさん登場にびっくりした様子でしたが、一生懸命手を振っていました。 **18年12月**
- 久しぶりにゆっくりできました。 **20年 7 月**
- お話も生放送の育児雑誌を読んでいる感じで、とても楽しかったです。いつもは子どもが何をしているのか、目で追っている自分がいましたが、今日はおしゃべりに没頭していた自分だったのも、なんだか嬉しかったです。 **20年 8 月**
- 子どもが楽しそうに遊んでいるのを、遠くから見れて、ホッと一息つけました。みんなの子育ての様子を聞けて、とても参考になりました。 **20年10月**
- いつも学生や先生の温かい対応、ありがとうございます。子どもを連れて遊びに行くのは大変で、母親もぐったり疲れてしまいますが、こちらに遊びに来るのは全然苦ではなく、逆に癒されます。子育てをサポートしてくれるのは、家族以外の人の存在もとても重要だと思いました。 **23年7月**
- 今日は、朝から上の子を病院と園へ送り、片付け・洗濯など忙しかったので、ここへ来させてもらうか悩んだのですが、やっぱり来て良かったです。子どもの笑顔と成長を見られたし、私も癒されました。主人に好きなところを伝えようと思います。 **23年 7 月**
- 3歳の娘が家を出るとき、「お兄ちゃんお姉ちゃんのところ行くの？」と楽しみな様子で、聞いてきました。帰ってからも、「楽しかった〜」とパパに報告しています。この会に参加していて、よかったなと思いました。 **23年10月**

考察――母親にとって日常の生活には、子どもや家族のために行う作業が多く、母親が自己を見つめたり自身のために何かを行ったりする作業は、十分あるとはいえない。子育て広場では些細なことで、自分のために何かをしてもらったという喜びや感動に溢れていると、感謝の声をいただく。例えば、廊下ですれ違った学生が、挨拶をしてくれたことや笑顔で迎えてくれてことで、ほっとした気持ちになると答える。また、子どもと少し離れたことで気持ちがほっとしたことや、自分のためにしてもらった何げない行為によって安らいだこと、話し合いによって気持ちが開放されすっきりしたなど、様々である。しかし、どれも些細なことが多く、その見逃しやすい些細な心の動きに丁寧に対応することが、母親にとって必要とされているのではないかと考える。これは、母親の思いが安心した状態であることと、母親

の心を動かす刺激があることによって、気分を転換させる作用となっている。この母親の心を動かす刺激となるのは、言葉や行為、雰囲気など様々ではあるが、その場のみを楽しく終えるためではなく、この心の動きがきっかけとなり、子育てに向かう１つの起点となる要素があると考えられる。

⑥学生の対する意見

- 学生さん方には、子どもの保育と共にお母さんたちや子どもをたくさんほめることのできる保育者になっていただきたいなあと思います。自分の子育てに自信を持っているお母さんは少ないです。 **18年６月**
- 学生時代本当に「小さな赤ちゃん」に触れることができたらよかったなーという思いから、学生と赤ちゃんとお母ちゃんと話ができる場も作ったらどうかなと思います。母乳を飲んでいる姿とかなかなか見ることないと思うから。 **18年７月**
- 保育士の方が一時も目を離さず、しっかり見てくださって、子どもも初めはぐずっていましたが、だんだん慣れてきて、私から離れて遊んでくれて、良かったです。対応の仕方が「さすが保育士さん！」という感じです。 **19年８月**
- 今年も楽しいひとときをありがとうございました。学校の中も生徒さんたちも挨拶してくれたりと、ここに来ると気持ちのいい空間だと思います。 **19年12月**
- 今回初めて参加しましたが、学生さんが子どもを見ていてくれるので、少しですが自分の時間が持てて、嬉しかったです。未来の保育士さんたちの姿も見られて、自分のときのことを思い出して、また新しい気持ちで子どもと向き合うことができそうです。 **20年５月**
- 娘もなかなかなれず、保育士さんも手こずらせているようでしたが、子どもにとってもこんな風に他の人に遊んでもらったり、いろいろな場へ出て行くことも必要だと思うので、楽しませてもらいました。保育士たちの初々しい姿もとても可愛く、一生懸命見ていただきました。 **20年５月**
- 息子はいつも他のこと仲良く遊べず、すぐに手を出して泣かせてしまい、悩んでいました。終わった後、学生さんが『今日はお友達に「遊ぼう」と声をかけたり、「どうぞ」と貸してあげたり、できていましたよ』と報告してくださり、子どもの成長を知ることができ、とても嬉しく思いました。心温まる一日でした。 **20年12月**
- 学生さんたちが、子どもの名前を覚えてくれていて、嬉しかった。 **23年８月**
- 今日は、歩けるようになったのをお兄さんお姉さんに褒めてもらって、とても嬉しそうでした。 **23年８月**
- 今日は、「三匹のこぶた」の絵本一つでも、本によって結末が違うことに驚きました。学生さんがとても一生懸命説明してくれる姿が嬉しく、勉強しているんだなと伝わってきました。子どもが絵本が大好きで、毎晩読んでいますが、今日教えていただいたことを気に留めながら、また絵本探しをしていきたいと思いました。 **23年９月**

考察――本学の子育て支援活動の特色の一つに、学生が子どもたちと遊ぶことにより、母親が少しの時間子どもから離れ、考える場を持つことが、他の支援の形態とは異なる点である。これは、子どもを預けることが目的ではなく、子どもとの距離をとることで、子どもを見つめ自己を見つめる場を作ることになるため、重要な仕組みであると考えていた。これについ

て感想には、子どもや自己について語っているが、その他に学生の成長をとても気にしていることが、感想の随所に感じられることであった。母親は、わが子の成長を共に喜ぶ学生の姿や、我が子のために全力で遊ぶ姿に対し、率直な喜びと安心感が伝わるものであった。これは、母親と学生が一緒に時間を共有し、不安なども語り合ううちに、母親にとって学生の存在は、共に子どもを見つめ、同じ方向をともに歩む人となっていることが考えられる。つまり保育者に必要とされる「母親に寄り添う保育」を行い、いつしか関係を作り始めているからこそ、学生に対する期待や学生自身の成長を気遣う言葉がつづられているのではないかと思われる。

また他の支援活動と異なることの一つに、専門知識を持つ経験者でなく学生だからこそ、母親や子どもから学ぶ姿勢である点や経験の未熟さがある点に大きな違いであると考えられる。支援活動の多くは、参加される母親にとって、支援されているという立場であり、助けられているという感覚はぬぐいきれない。しかし、ここでは学生が学び、母親と子どものために準備を重ね、失敗したり困ったりする場面も見ている。そこに、思い通りにはならない子育て中の自分自身と重ね合わせ、さらに自分の存在が若い学生の糧となるならば役立てて欲しいという思いに動かされているのではないかと考えられる。これは、子育てによって感じていた孤立した思いを広場でのかかわりから、一歩でも外部と繋がることのできた感覚を得ていると思われる。

(4) 考察

子育て広場は、その日のメンバーによっても、その日の子どもの様子によっても、母親の思いや気づきは変化し、同じ日の感想であっても母親の状態によって大きく異なる。その中で、長い期間を通して集まった母親たちの声には、切実な問題もあれば、広場の中で感じた小さな気づきや自己を見つめる穏やかな目が短い文章につづられている。これらは、作られた言葉ではなく、実体験として出てきた母親一人ひとりの思いであった。今回の研究では、この思いを6種に分類したが、子どもを見ること・自己を見つめることができた時、新鮮な驚きとともに母親は自ら子どもや、子育てについて感じ考え、答えを導き出していけることがわかった。これまでの支援の中には母親と子どもとが離れることによって、母親が母親として育つ部分を、減らしてしまっているのではないかと懸念されてきた。しかし、母親の様々な感想を丁寧に分類することによって、母親として、一人の人として育つ過程が見られた。すなわち、広場に参加することは、子どもや他者と関わる形が変化することで、子どもを知り他者を知り自己を知ることになり、教えられる支援ではなく、自らが答えを導き出せる支援となっていることが考えられる。

3．総合考察と課題

この6年にわたる「子育て広場」の活動は、手探りの状態で進み、母親や子どもにとって何が必要なのかを検討し、迷いながら改善してきた支援活動であった。

主たる目標として「母親と子ども」「母親と母親」「母親と地域」をつなぐ活動を行ってきたが、母親の感想の中から、子どもや他者を見つめることが、子どもや他者を知ることにつながり、母親自身がそれらに気付き、自ら大切なことだと実感していく過程が見られた。これまでのように多くの情報に混乱するのではなく、必要な情報は情報として捉え、母親は自

分なりの答えを導く体験によって、母親として、一人の人として、変化していた。つまり「母親と子ども」をつなぐ場を作ることで、「子育て広場」は「母親が母親として育つこと」を支える支援の形となっている。これを母親の立場から考えてみると、この広場の支援は、誰かが答えを出してくれる場所ではないが、答えがふとした瞬間に見い出され、自分に自信が持てるようになるといった流れがある。つまり、母親に対し答えや結果を急ぎ無理に変化させることよりも、一人ひとりの母親に則した支援の形があることも必要であると考える。そして、母親の「話す」「聞く」「見る」行為が、子どもや母親自身、他者をつなぐ役割を果たす重要な点であった。

また、「母親と子ども」をつなぐ支援の中には、スタッフに学生が加わることで、子育てする母親にとって効果的に作用していることが明らかとなった。これが何よりも支援の中には、気付きにくい点であり、共に考え共に育ち合う保育者の姿勢の重要性を改めて感じる点となった。母親は社会から一時的に離れ、一対一の子どもとの生活に入り、休むことなく家庭の中で過ごす。さらに人との関係は減り、会話は減り、孤独となる。ところが広場に参加し、一生懸命にわが子を可愛がる学生を見たときに、もう一度わが子の存在を確認する。そして、わが子に対するまなざしが、自分一人ではない感覚を持った時、心は安定し、ほっと息をつく一瞬を得る場となっていた。さらには学生が、保育の専門性を持ちながらも、経験が未熟であるために、誠実にかかわり努力する姿と母親自身の気持ちとが重なる。これまでに参加した母親からは、「社会に必要とされていない感じがしてしまう」と話されることが多くある。このことからも学生は、母親にとって、少しでも自分の経験したことが学生の学びとなるならば、認められた感覚が得られ、自身の存在をもう一度見つめる機会となる。言い換えれば、支援されているのではなく、互いが育てあう、あるいは共に育ちながら子どもとつながる感覚を持てることが、必要なのである。このことからも、支援の場において、支援する側の基本的な姿勢のあり方には、まさに子どもや母親に対する誠実さが不可欠であり、更に「母親と子ども」をつなぐ方法を様々な角度から見つめていくことが、母親一人ひとりに即した支援となるのではないかと考える。

引用文献・参考文献

1）落合恵美子「21世紀家族へ―家族の戦後体制の見かた・超えかた」有斐閣選書　1994. P193

2）大日向雅美「子育て支援が親をだめにするなんで言わせない」岩波書店　2005.

3）鯨岡　峻「＜育てられる者＞から＜育てる者＞へ―関係発達の視点から」日本放送出版協会　2002.

4）加藤寿子「大学における『子育て支援』の意義と可能性(2)」日本保育学会第61回大会発表論文集　2008

・大日向雅美「子育てと出会うとき」日本放送出版協会　1999.

・大豆生田啓友「支えあい、育ち合いの子育て支援―保育所・幼稚園・ひろば型支援施設における子育て支援実践論―」関東学院大学出版会　2006.

・文部科学省「幼稚園教育要領」フレーベル

・厚生労働省「保育所保育指針」フレーベル
・渡辺久子「子育て支援と世代間伝達―母子相互作用と心のケア」金剛出版　2008.
・渡辺久子「母子臨床と世代間伝達」金剛出版　2000.